

「青頭巾」の翻案方法―『水滸伝』を中心に

中 田 妙 葉

「青頭巾」は、上田秋成の第九話からなる短編集『雨月物語』の第八話目にあたる。

この話は、食人説話に高僧説話を重ね合わせたものであり、人食説話として『艶道通鑑』巻四「大江定基の段」等を、快庵禪師の高僧説話として『大中寺演義』及び『日本洞上聯燈録』等を、『水滸伝』第五回や第六回の一部のプロットに更に重ね合わせた構成となっている。鶴月氏は、この構成について、『水滸伝』との間に知的連想を作り出すことが、構成上の目標の一つとされている。しかし、ここで、単に構成の一致ばかりでなく、この作品の構想の全体が実は『水滸伝』に胚胎したものであることが示されている⁽¹⁾と、この作品の中における典拠としての『水滸伝』の重要性を指摘している。

「青頭巾」の前半をやや過ぎた所の「筋と措辞が『忠義水滸伝』百回本 第五回「小霸王醉入銷金帳 花和尚大鬧桃花村」第六回「九紋龍剪徑赤松林 魯智深火燒瓦罐寺」にかけての筋と措辞を踏まえていることは、早くから指摘されている⁽²⁾のではあるが、そのような典拠研究と異なり、この作品における『水滸伝』の典拠としての意図について述べた研究が、あまり見受けられない。もちろん「直くたくましき性」を論じるには、『水滸伝』の

魯智深像が必要不可欠である。しかしながらそれ以外に、『水滸伝』を典拠とした修辭・叙述・構想・イメージ等が、「青頭巾」作品に如何に構築されているかという、効果や意味に注目し、論じた研究を、鶴月氏や徳田氏^③以外に目にするのがないのである。それは森山氏の指摘が、言いえているのかもしれない。

内容的には魯智深の事件や映像を完全に物語の中から消去して、その表現の構想のみを奪取しているのである。……ここに『水滸伝』の叙述がいかされていようとは、一般の読者は気がつかない。つまり秋成のこの部分の方法は、映像の中核の消去、その表現の構想の奪取という奇妙なものである。これをわたしは典拠を異化にするという意味で、異Ⅱ形象化の方法と呼びたいと思う。^④

『水滸伝』の叙述は、本当に消去されてしまっているのだろうか？そこで、今一度「青頭巾」に『水滸伝』を照らし合わせ、『水滸伝』が「青頭巾」創作において、どのような役割を担っていたかを探ってみた。その過程において「映像の中核の消去、その表現の構想の奪取」という評価が示唆する意味がわかるのではないか、と思うのである。

筆者はこれまでの拙論のなかで、秋成が中国小説を「雨月」作品に取り入れる様子を探るために三つの手法に分けて、分析してきた。第一類の手法は、作品から措辞や場面を直接に引用した手法である。この手法を多く用いた作品が「菊花の約」や「蛇性の姪」などであり、確かに構成から、典拠を踏襲したことが明白である。第二類の手法は、措辞やプロットを借用することで、趣向を作品にとり込む手法である。第三類の手法は、間接的な借用である。明らかな借用の痕跡を認めることはできないが、表現上の類似性等から含意を認めるか、または背景に中国文

一、旅の僧が暮方村里に入り、人々から恐れられているところに、裕福な家の主人が人々をなだめて、旅の僧を家に請ずる場面

少し長いので、先に簡単に梗概を述べてから、酷似している箇所分析をする。まずは、「青頭巾」の梗概である。

諸国を行脚していた快庵禪師という高僧が、美濃国の竜泰寺から奥羽の方に旅立った。下野国の富田という里で日が暮れたので、一宿を求めようと裕福そうな屋敷に立ち寄ると、田畑より戻る男たちがこの僧の立っているのを見てひどく怯えた様子で「山の鬼が来たぞ」とわめいた。人違いとわかると、非礼を詫びて、快く夕食をもてなした。

『水滸伝』第五回「小霸王醉入銷金帳 花和尚大鬧桃花村」の典拠でも同様な展開である。

五台山を追われた魯智深は、智真長老から東京へ行くことを勧められ、山を離れる際に、四句の偈言を授けられる。桃花村に差しかかり、遠くに莊院を目にし一宿をもとめに行く。家の者はこれを拒み、さらに頼む魯智深を縛ろうとし、罵る者や囃し立てる者まで出てくる。そこに、主人が走り出てきて、一同をなだめ、魯智深からわけをきくと、家に招き入れた。

次に、酷似している箇所の分析をこころみる。

① あるじ山楞をとりて走り出で、外の方を見るに、年紀五旬にちかき老僧の、頭に紺染の巾を帔き、身に墨衣の

破れたるを穿て、裹みたる物を背におひたるが、杖をもてさしまねき、檀越な⑦に事にてかばかり備へ給ふや。遍参の僧今夜ばかりの宿をかり奉らんとてここに人を待ちしに、おもひきやく異しめられんとは。瘦法師の強盗などなすべきにもあらぬを、なあやしみ給ひそ*⑤といふ。莊主枒を捨てて手を拍て笑ひ、「渠等⑥が愚なる眼より客僧を驚しまゐらせぬ。」宿を供養して罪を贖ひたてまつらん⑦と、礼まひて奥の方に迎へ、こころよく食をもすすめて饗しけり⑧。

魯智深提起禪杖、卻待要發作、只見莊裏走出一個老人來。但見那老人、年近六旬之上。拄一條過頭拄杖、走將出來、喝問莊客：「你們鬧甚麼？」莊客道：「可奈這個和尚要打我們。」智深便道：「小僧是五臺山來的和尚、要上東京去幹事、今晚趕不上宿頭、借貴莊投宿一宵、莊家那廝無禮、要綁縛洒家。」那老人道：「既是五臺山來的僧人、隨我進來。智深跟那老人直到正堂上、分賓主坐下。那老人道：「師父、休要怪*。莊家們不省得師父是活佛去處來的、他作繁華一例相看。老漢從來敬重佛天三寶、雖是我莊上今夜有事、權且留師父歇一宵了去。……⑩太公道：「師父請喫些晚飯、不知肯喫葷腥也不？」……沒多時、莊客掇張桌子、放下一盤牛肉、三四樣菜蔬、一雙箸、放在魯智深面前。」

(魯智深が禪杖を持ち出し、暴れだそうとしたところ、屋敷から老人が一人出てきたのが見えた。その老人を見ると、年の頃は六十歳を過ぎている。身の丈よりも長い杖をついて出てきて、小作人に大声で「何を騒いでいる」と問うと、小作人は「どうにもこうにも、この坊主が私たちを殴ろうとしたんです。」という。魯智深は「自分は五台山から来た僧で東京に行くところである。今夜一晚の宿が見つからなかったので、こちらに宿を借りようとしたら、小作人らは無礼にも私を縛ろうとしたんだ。」という、老人は、「五台山からきた僧

よ、私について来なされ」と、魯智深を居間に招き入れた。「師よ、どうぞ悪く思わないでください。小作人は師が高僧のおられる場所から来られたとは知らず、にぎやかな輩として見てしまったのです。私は生来仏の教えや僧侶を敬い重んじておりますので、私の宅では今夜あることが有りますが、ひとまず師には一晩お泊まりいただきます。主は「どうぞ晩ご飯をお召し上がりください、生臭物は召し上がりますか?……:…:ほどなく小作人がテーブルを持ってきて、牛肉一皿と、三四品の料理と箸一膳を、魯智深の前に並べた。)

「*」が付いている「休要怪」は訳にしるしたように、「どうぞ悪く思わないでください」という意味である。秋成はこの箇所から「なあやしみ給ひそ」という台詞を導いたと思われる。もともと思い違いをして引用したか、それともこの言葉がヒントとなったかは不明である。

ところが、『通俗忠義水滸伝』ではこの箇所にあたる句は以下のように記されている。「和尚怒(イカリ)ヲ休(ヤメ)玉へ」(一)内の文字は上記の漢字に振られたカナである。―筆者注)「休要怪」と同じ意味を、異なった言葉で表現しているだけではあるが、「あやしい」という言葉は導けない。秋成は「なあやしみ給ひそ」という語句で、「私をあやしい者と思わないで下さい」と表現している。まさに、「怪(あやしい)」に「休要」という禁止の言葉を用いて表現しており、『水滸伝』原作と「青頭巾」での違いは、「怪」という意味を、『水滸伝』原作では「責める、とがめる」という意味で使い、「青頭巾」では「怪しむ、いぶかる」という意味で用いている違いのみである。

また、左記にあげている箇所の冒頭は、「あるじ…見るに」となっており、『水滸伝』原作でも魯智深が「見」ていることを、二度にわたって述べている。しかしながら、『通俗忠義水滸伝』ではこの箇所にあたる句は、「禅杖ヲ

風車二輪(マハ)シメ、打て菟(カカラ)ントセシ処ニ、門ノ内ヨリ一個(ヒトリ)ノ老人走り出(イツ)ル。此人年已二十有六ニシテ……」という、第三者が述べる客観的な叙述にとどまっている。そして面白いことに、この「見る」という言葉一つで、叙述から受ける場面のイメージが、全く変わってくるのである。

この場面は、主人の目を通して老僧をとらえているので、語句を追っている読者の脳裏には、老僧一人がクロウズアップされる。それと同時に、見知らぬ者への警戒心という主人の感情をも、読者はなぞることになる。それは『水滸伝』の原作も同じで、魯智深の視界をとおして、その場の情景が映し出されている。原作では、小作人達が訳のわからないことをいつていたかと思うと、さらに主人が出てきた。さてどうなるのだろうか?という魯智深の困惑した思いに、読者が同調することであろう。しかしながら、『通俗忠義水滸伝』の叙述では、客観的な表現方法をとっているのです。読者の脳裏にはクロウズアップされる人物はおらず、ただ、魯智深と小作人がおりそこに主人が現れる、という情景が開示されることとなる。

以上の二点の箇所から、秋成が「青頭巾」を創作する際に、『通俗忠義水滸伝』のみならず、原作をも引用していると思われるのである。この点については、今後の課題としていきたい。

①の情景に描かれている主人と快庵禪師の描写は、しばしば『水滸伝』の「似年近六旬之上。拄一條過頭拄杖、走將出來」からの引用と提示される。しかし、よく見ると「只見莊裏走出一個老人來。但見那老人時」も同じ情景を描いている。「青頭巾」では主人が快庵禪師を「見て」いるのであるが、『水滸伝』では魯智深が主人を「見」ている。また、②の快庵禪師が「杖をもてさしまねき」主人に訊いている箇所は、『水滸伝』では莊園主の劉老人が小作人に「喝問」している。これらの情景の描き方からわかるように、魯智深の言動が快庵禪師のみに描かれるわ

けではなく、主人に重ねたり、劉老人の言動を快庵禪師に映したりと、情景や言動を細かく移している。また、①の情景の下地となったであろう叙述が二箇所に見られるように、典拠では似通った表現が繰り返されることもあるのだが、秋成は短い言葉でスッキリとまとめていることがわかる。

右の分析から、「菊花の約」や「蛇性の姪」のように話の枠組みをそのまま当てはめているわけではないが、この一段を相当引用していることが分かる。その翻案方法は、典拠の順番や動作主を変えたり、言葉を変化させて原作の意味を組み入れているなど、その表現方法の緻密さがよく伺える場面であり、秋成の翻訳方法の技の高さが伺える箇所である。

二、主人は旅僧に、人々が彼を見て騒いだ理由を語る場面

主人が快庵禪師に、先ほど連中が禪師を見て恐れた理由を語るといふ話の骨子には、『水滸伝』第五回の話がそのまま使われており、そこに高僧の人食説話を組み込むという形になっているのである。対して、『水滸伝』の劉老人が語った理由は、桃花山の盗賊の頭領が、劉家の今年十九になる娘を見初め、今晚婚礼をしにやってくるというものであるから、理由自体は異なるものである。

しかしながら、「青頭巾」の理由となる故事の細部は、『水滸伝』のこの箇所から要素を細かく引き出し、より立体感のある話として構成されている様相がみえる。その手法を以下に紹介しよう。

富田の里で、暮れになると家々の戸を閉ざしてしまふようになった主なわけは、童子の屍を食らい鬼と化したことが直接の原因ではなく、鬼僧が、「夜々、里に下りて人を驚殺し、或は墓をあばきて腥々屍を喫ふありさま」だ

からである。にもかかわらず、「されどいかがしてこれを征し得ん」といった、手の施しようがない状態のままであるから、唯一の手立てが「ただ暮れになると家々の戸を閉ざすのみ」である。「さるゆゑのありてこそ、客僧をも過りつるなれ」と言つて、主人は話を切りあげた。言い換えれば、鬼僧が墓を暴きに里に下りてこなければ、鬼僧は人々にとって生活に関わりない、遠い存在となつたことであろう。

そして、この箇所はまさに、『水滸伝』で劉老人が魯智深に理由を話している一場面の要素が引用されている。

被此間有座山、喚做桃花山、近來山上有两个大王，扎了寨栅，聚集著五七百人，打家劫舍。此間青州官軍捕盜禁他不得。因來老漢莊上討進奉，見了老漢女兒，撇下二十兩金子，一疋紅錦為定禮，選著今夜好日，晚間來入警老漢莊上。又和他爭執不得，只得與他，因此煩惱，非是爭師父一個人。

(近くに桃花山と呼ぶ山がありますが、近頃二人の盜賊の頭領が寨を構えて、五百人にも七百人にもなる数の手下を集め、民家に強盜に押し入り、それを青州の官軍も捕らえることができないありさまです。私の家にも冥加金をたかりにきた際に、娘に目をつけると、金子二十両と紅錦一匹を結納品によこしました。今夜がその婚礼日ということで、夜には我が家に婿入りにやってきました。とても争うことのできる相手ではなく、娘を渡すしかありません。それで悩んでいるわけでした、師のこともめたわけではないのです。)

直接の言葉は引用しているわけではないが、話の筋を一つ一つに、異なる表現を重ねていることが、認識できるのではないだろうか。——盜賊達が山里に下りてきて、人々を脅かしているにもかかわらず、官軍すら手をつけられない、手をつけられない状況だから、ただ娘と品物を渡すしか手立てがない。——という理由の骨子自体は同じ

なのである。

さらに、村人を震え上がらせている山賊の頭領は「殺人不眨眼魔君」（殺人をしてもまばたきすらない魔もの）である。頭領の残酷さを印象づける「魔君」という語からは、「青頭巾」で里の人を震え上がらせる鬼僧が元は高僧であったものの、「心放」ったことから「妖魔とな」ったことを連想させる。

三、旅僧は、村や家を悩ませている人物を翻意させることを主人に告げる場面

快庵禪師は、主の話をきいて、「世には不可思議の事もあるものかな」と、不可思議な話の数々を、『五雜俎』から引用してひとしきり述べる。そして、阿闍梨の話にもどり、「よき法師なるべきものを」と哀れみ、阿闍梨が以前、修行に励んだのも、その後愛欲の迷路に陥って鬼と化したのも、「ひとへに直ぐたくまじき性のなす所」であると説く。

そも平生の行徳のかしこかりしは、仏につかふる事に志誠を尽せしなれば、其童児をやしなはざらましかば、あはれよき法師なるべきものを。一たび愛慾の迷路に入りて、無明の業火の熾なるより鬼と化したるも、ひとへに直ぐたくまじき性のなす所なるぞかし。心放せば妖魔となり、収むるときは仏果を得るとは、此の法師がためしなりける。老衲もしこの鬼を教化して本源の心にかへらしめなば、こよひの饗の報ひともなりなんかし」と、たふときころさしを発し給ふ。莊主頭を畳に摺て、「御僧この事をなし給はば、此の国の人は浄土に生まれ出でたるがごとし」と涙を流してよろこびけり。

この場面では、先にあげた魯智深の話に続く一段の語彙が、肝心な言葉として、表に出す形で引用されている。魯智深は剛毅な性格だけに、劉老人の話を聞き、開口一番に、「彼が思い直すよう、拙僧が説得してやろう」と、山賊の頭領を翻意させる意を告げる。それに対し、快庵禪師が意を告げるのは、話の最後になるので、引用箇所が反対となっているのが、特徴的である。

② 智深聽了道：「原來如此。小僧有個道理，教你回心轉意，不要娶你女兒如何？」太公道：「他是個殺人斬眼魔君，你如何能夠得他回心轉意？」智深道：「酒家在五臺山（智）真長老處，學得說因緣，便是鐵石人，也勸得他轉。」今晚可教你女兒別處藏了，俺就你女兒房內說因緣勸他回心轉意。」太公道：「好卻甚好，只是不要持虎鬚。」智深道：「酒家的不是性命！你只依著俺行，並不要說有酒家。」太公道：「卻是好也！我家有福，得遇這個活佛下降。」莊客聽得，都喫一驚。（原文中の（智）は筆者による加筆である）

（魯智深は聴くやいなや「そういうことだったのですか。ならば拙僧に考えがあります。そやつに思い直させて、そなたの娘御を娶るのをやめさせるようにするのは、如何かな？」という。劉老人は、「あやつは殺人を犯してもまばたき一つしない魔物です。あなたがどうやったら彼の考えを変えられるのでしょうか？」という。魯智深は「おいらは五台山の智真長老のところ、因縁を説くことを学んだ身だ、冷徹で血も涙もない奴にだって説いて改心させるさ。今晚は娘御を他の場所に隠しておいて、おいらが娘御の部屋でやつに因縁を説き、改心させよう。」という、劉老人は「ありがたいにはありますが、危険なことに臨むようなことはなさらないのがよろしいかと。」という、魯智深は「おいらの命はなんでもないさ。おいらの言うことを聞いてさえいければ良いし、おいらのことは気にしないでくれよ。」といった。劉老人は「それは

ありがたい！我が家に活き仏さまがお越しになるとは、幸せなことだ。」といい、小作人達は皆聞いて、大変驚いた。

ここで興味深いのは、上記で述べたように、魯智深は開口一番に「回心轉意」させると口外し、意を告げているのに対し、快庵禪師が鬼僧を翻意させるという意志を口外するのは、話の終わりに差ししかかったところである。また、自信満々の魯智深に対し、懐疑的な劉老人が、何回も否定的な言葉を発して、魯智深の知力を図るくぐりには、「青頭巾」では削除されており、快庵禪師が意を告げると、主人はすぐに「頭を畳に摺りて」「涙を流してよろこぶのであった。しかしながら、ここまでの叙述には、快庵禪師が高僧だということを、魯智深のように明確にあらわされてはいない。快庵禪師は自らを「遍参の僧」と告げただけである。ゆえに、主人が知るよしもないのである。それに対し、魯智深は自分の来歴を告げた。劉老人は、魯智深が、活仏がいるという「五台山」から来た僧だということを知ったがゆえに、家に通したのである。それにもかかわらず、劉老人は不安から懐疑なことばを発し、危険なことをするなど魯智深の申し出を断ろうとする。対して、「青頭巾」の主人はまるで全幅の信頼を快庵禪師に寄せたように、心配すらもせず、快庵禪師の一言で、涙を流して喜んだ。面白いことに、この場面では、読者も「青頭巾の」主人の気持ちに同化でき、違和感なく話を追うことができる。典拠作品との比較をしなければ、快庵禪師が鬼僧のところへ赴くということが危険にもかかわらず、主人が止めもしないということに対し、疑問にすら思わなかっただろう。

そして、ここに、快庵禪師が鬼僧の話を聞くと、すぐに並べ立てた不可思議な話の意味があると、筆者はみる。そこでさらに、「酒家在五臺山智真長老處、學得說因緣、便是鐵石人、也勸得他轉。」の一行に注意したい。直接

四、旅僧が荒れ果てた寺にいたる場面

快庵禪師が山寺に行ってみると、「楼門^①は荆棘おひかり、経閣もむなく苔蒸ぬ^③。蜘蛛網をむすびて諸仏を繫ぎ、燕子の糞護摩の床をうづみ、方丈廊房すべて物すさまじく荒れはてぬ。」というありさまであった。

この箇所は、『水滸伝』「第六回 九紋龍剪徑赤松林 魯智深火燒瓦罐寺」で魯智深が「瓦罐寺」に訪れたところ、ひどく荒廢していたさまを描写風景から引用している。次に引用箇所を見てみよう。言葉を入れ替え、つなぎ合わせ、廢院のイメージが短い言葉で巧みに表現されていることがわかる。

鐘樓倒塌、殿宇崩摧。山門盡長蒼苔、経閣都生碧蘚。……、觀世音荆棘纏身、……、帝釋欹斜、口内蜘蛛結網。

（鐘樓は倒塌し、殿宇は崩摧す。山門は尽く蒼苔を長り、経閣は都て碧蘚生う。……、觀世音は荆棘を身に纏い、……、帝釋は欹斜して、口内に蜘蛛網を結ぶ。）

この短文の中には、秋成が、「青頭巾」作品中に『水滸伝』の叙述を取り込む上での手法が、もつとも特徴的に現れているといえる。原文は、同じようなイメージを、語句を変えて、表現を重ねるという方法を取っている。語句を重ねるといふその表現方法は、読者に荒涼としたイメージを膨らませる効果をもたらしている。しかし秋成は、重なっている語句を、ことごとくそぎ落とし、細かくつなぎ合わせることにより、表現の風通しをよくしてい

る。その効果は、情景にただ荒廃のさまを描くだけでなく、荒廃しているなかにも、情調的な余韻を持たせた叙述としてあらわれているのである。

五、寺ではなかなか対応する者が出てこないが、やがて瘦せた僧が現れる場面

山寺で鬼僧と対面する場面である。荒廃している山寺の光景に加えて、瘦せこけた僧が、やっとよろよろと歩み出てきて応対する。ここは、どこか異常な雰囲気を醸し出す一段である。

快庵禪師寺に入りて錫を鳴し給ひ、「遍參の僧今夜ばかりの宿をかし給へ」と、あまたたび叫どもさらに応なし。^①眠藏より瘦槁たる僧の漸々とあゆみ出で、咳びたる声して、「御僧は何地へ通るとここに來るや。此の寺はさる由縁ありてかく荒はて、人も住まぬ野らとなりしかば、一粒の齋糧もなく、一宿をかすべきはかりごともし。はやく里に出でよ」といふ。^②

快庵禪師が寺に入って何度呼べども対応されない場面や、「瘦槁たる僧」、「一粒の齋糧もなく」という言葉が直接引用されていることは指摘されることではあるが、言葉を変えて典拠のニュアンスを映し出す手法により、「瓦罐寺」の退廃的な雰囲気を作品に取り込んでいるのがわかる。

① 智深把禪杖就地下擲著，叫道：「過往僧人來投齋。」叫了半日，沒一個答應。……，尋到廚房後面一間小屋^{②④}

見幾個老和尚坐地、一個個面黃肌瘦。……那和尚搖手道：「不要高聲。」智深道：「俺是過往僧人、討頓飯喫、有甚利害。」老和尚道：「我們三日不曾有飯落肚、那裏討飯與你喫？」……老和尚道：「你是活佛去處來的僧、我們合當齋你。爭奈我寺中僧眾走散、並無一粒齋糧。老僧等端的餓了三日。」

（魯智深は禪杖を握つてどんと地面をつくと、大声で「通り過ぎりの僧だが、お斎にあずかりたい。」といった。大声でいくら呼んでも、ちつとも返事がない。……厨房に行つてみると、その後ろの小屋に何人かの年をとつた和尚が座つていた。誰もかれも顔色は黄色くくすみ、痩せこけている。……その和尚は手を横に振りながら「大きな声を出すでない。」といった。魯智深は「おいらは通り過ぎりの僧だが、飯を恵んでもらいたい。何かまずいことでもあるのかな？」というと、年老いた和尚は「我々はすでに三日間飯を腹の中に入れていないのだ、どこにおまえさんに食べさせる飯があるというのだ。」という。……老和尚は「そなたは活仏がおられる処から来た僧侶であるから、我々は当然齋をさしあげねばならぬ。が、いけません、我が寺の僧達はちりぢりになつてしまつて、一粒も施す糧がないのだよ。老僧達は本当にこの三日間、ひもじい思いをしているのだ。」という。）

部屋から弱々しく歩き出してきた僧のイメージは、「一間小屋」に坐つていた何人かの僧が「老和尚」であることから作り出されたことがわかる。老人のあぶなげな足取りでよたよたと小屋から出てきた様子が、そのまま山寺の僧に反映されている。また、『水滸伝』では施しを受けたという申し出を、一晚泊まらせて欲しいという要望に変えて、「青頭巾」の作品中に生かしているのは明らかである。「人も住まぬ野らとな」ったのも、瓦罐寺の僧達がすでにちりぢりになつてしまつたという状況を、さらに誇張した様相となつている。また「一宿をかすべきはか

りごともなし」という状況も、老僧達が三日間も飯を腹に入れていない、ひもじい思いをしている、というプロットを簡潔に表現していることがわかる。

この場面で注目したい手法として、魯智深が言っている「有甚利害」という言葉を、「青頭巾」では立場を替えて、訪問先の山寺の僧が「さる由縁ありて」という言葉にしている。もちろんその「由縁」があることから快庵禪師は訪れており、一見当たり前のようにみえる一言である。その言葉は、快庵禪師を追い払おうという意味を持ちながら、読者にはこれから何かが起こることを想起させる、要の一言となっている。ただ、その言葉を添えるきっかけを作ったのは、魯智深がいぶかしげに訊いたこの一言ではないかと思われる。秋成は、立場を入れ替えて同じような表現を使うことにより、何気ない一言を、効果を何倍にも増幅させて、重要な一言に創り上げたのである。

六、結論

「青頭巾」作品の前半を、『水滸伝』の第五回、第六回とつぶさに照らし合わせてみると、今までに指摘されてきた以上に、趣向やイメージを取り入れてきていることがわかってきた。さらに、その手法は、一人の人物から発せられた言葉を、何人かの人物に語らせることにより、場のイメージを増幅させる効果をもたらせ、特徴ある人物形象を創り上げているのである。

秋成作品が成功している手法として、今回よくわかったのが、言葉を見事に細かくつなぎ合わせる方法である。彼は一言の背景に存在するイメージを捕らえることが非常に的確であり、さらに、その効果な運用を見いだすのも、長けていることがわかる。そして、語句やその背景に存在するイメージを細かくつなぎ合わせるという技法

で、典拠上の意味には本来与えられていなかった、ニュアンスやイメージまで醸しだすことに成功しているということが、あらためて確認できたことと思う。

その特殊な手法ゆえに、一見したところ、まるで典拠が用いられておらず、秋成自身の言葉を用いているとか、用いられていても「消化」され「異化」されているように思われるのであるが、今回の分析により、実際は言葉の意味やイメージを巧みに使い、語りや構成に大きく反映させていることが認識できた。典拠から引用された言葉は、イメージとなり、他の言葉達の下敷きになりながらも、その存在を魅せ、作品を構成しているのであった。

それは、「浸透」という曖昧なものでなく、目をこらすと輪郭がはっきりと浮き出るものであるが、何気なく見ていると一つの風景のように、背景に溶け込んでしまうという絶妙な典拠方法である。読者は時々顔を出す漢語に異文化の刺激を感じながらも、その背後に『水滸伝』の起伏に富んだ話の流れと、数々の人物の生き生きとした言動が、和語で綴られている世界を支えているとは気づかない。物語は短い言葉でテンポよく話が展開するものの、その実、物語に活力をあたえ、その情景や心情を鮮やかに描きだしているのは、典拠の言葉たちである。それらの世界に目をこらして背景や輪郭に目をこらしていくと、何よりも、秋成の言語感覚の鋭さと、物語創作の手法の巧みさを再確認できるのである。

その手法を踏まえた次の段階として、魯智深の人物形象の意図が、問題となってくる。

「心放せば妖魔となり、収むる則は仏果を得る」という快庵禪師の言葉は、『水滸伝』第四回で、智真長老が魯智深を指していった「此人上應天星，心地剛直。雖然時下兇頑，命中駁雜，久後卻得清淨，正果非凡，汝等皆不及他。」（この人上は天の星に応じ、心は剛直である。今は凶暴な輩であり、入り乱れた命のもとにいるが、いずれは清浄になって非凡な悟りを開き、汝らが及びもつかない者となるであろう。）と説いた言葉からきているとも言わ

れる。無論、『怪談とのみ袋』の「魔仏一如と観じ」という言葉がもつとも照応していることから、この言葉自体が関係していることは否定できない。⁽⁶⁾しかしながら、徳田氏は、「直接のオリジンは他にあつたと考えなければならぬが」といいつつ「むしろ『水滸伝』から選ばれた構想が先にあつて、その上に、この言葉が選ばれていたと考えていいだろう」と述べている。⁽⁷⁾今回の分析を通し、筆者もその思いを強く持った。筆者も同意見である。

さらに、すでに鵜月・徳田両氏によって、魯智深の人物形象は、快庵禪師と山寺の僧の二人に分化されていると、指摘されている。秋成は人間の性を、魔的なものと聖なるものに分化し、対極化しているのだが、実は、この対極化している双方の性は、魯智深一人の身の上に描かれているものであり、その魯智深の二つの性を分化し、院主と快庵禪師それぞれに象徴する性として形象化したというのである。

両者の意見を踏まえ、筆者は、この二つの性と人物の形象化は、善悪の倫理以前に人間の本然を構想するという独自の考え方を明確にするために必要な構成であつたと思われるのである。秋成はその鋭い感覚で、人間に潜む性を見つめ、認識し、「直くたくましき性」という言葉を用いて作家秋成の思想を描き出したといわれるのであるが、その性と「水滸伝」との関わりについては、次回に考察していきたい。

・「青頭巾」は、中村幸彦・高田衛・中村博保校注・訳『英草紙・西山物語・雨月物語・春雨物語』（日本古典文学全集48）小学館、一九九三年、による。

・『水滸伝』は、李卓吾批評『明容與堂刻水滸傳』上海人民出版社、一九七五年、による。（『水滸伝』の引用箇所における日本語訳は、すべて筆者による。）

・『通俗忠義水滸伝』は、中村幸彦編『近世白話小説翻訳集 第六巻』汲古書院、一九八九年、による。

- (1) 鵜月洋 『雨月物語評釈』 角川書店、一九六九年、六〇五頁。
- (2) 徳田武 『日本近世小説と中国小説』 青裳堂書店、一九九二年一〇月、三〇三頁。
- (3) 鵜月氏は『雨月物語評釈』において、徳田氏は「第二部 読本の成立 第八章 秋成と『水滸伝』—『青頭巾』における— (同注2) において、『水滸伝』 典拠としての意味を研究された結果、魯智深のイメージが分化されて、快庵禪師ばかりでなく、当の院主も魯智深のおもかげをわかれたたものであり、快庵と院主の二人になったことを指摘しており、大変興味深い。
- (4) 森山重雄 『幻妖の文学 上田秋成』 三一書房、一九八二年、七七頁。
- (5) 話の分け方は、徳田氏の論文「第二部読本の成立 第八章秋成と『水滸伝』—『青頭巾』における—」において、六場面に分類した研究を参考にした。(同注(2))
- (6) 内村和至氏は「『青頭巾』論—「魔仏一如」観批判—」の中で、「魔仏一如」という言葉を、秋成の仏教観と共に、今一度見直す必要があると提言している。(『上田秋成論—国学的想像力の圏域』ペリカン社、二〇〇七年)
- (7) 同注(2)、六〇五頁。

—なかつ わかば・法学部准教授—